

明治歌壇と岐阜

(一)

—— 根岸派の人々を中心として ——

貞 光 威

この稿は近代性を獲得してゆく明治期の歌壇の流れを記述すると同時に、その動向の中で特徴ある歌風を形成していった岐阜地方の歌人の活動について検討し、あわせてこうした人々とかかわりで岐阜を訪れた歌人についても見てゆこうとするものである。

ここで、まず明治初年から三十年ごろまで、すなわち新派和歌運動が始まる前までの、わが国の歌壇の動きを見てみたい。

明治維新のあと、西欧の文化や文物が一度に輸入され、種々の制度も改革や発足を見て、文明開化の名のもとに、わが国の近代化は一気に推し進められた。しかし、古い伝統をもつ和歌の世界には、このような新しい時代の空気はなかなか浸透せず、明治になっても依然として江戸時代以来の和歌の流派である、桂園派・堂上派・鈴屋派・江戸派などが力を持っていた。このうちの桂園派は、「しらべの説」を唱えた香川景樹を祖とする流派で、明治期には八田

知紀・渡忠秋・高崎正風らがおおり、最も大きな勢力を占めた。これに対して、堂上派は、「古今伝授」を継承してきた公家を中心とする系統であり、この時期には三条西季知・岩倉具視・三条実美らがいた。また、鈴屋派は本居宣長の系統で、近藤芳樹・伊藤千広らがこれに属する。そして、江戸派は橘千蔭・村田春海らによって始められ、この時期には井上文雄らがいた。これらの諸派が、明治維新のあとにも江戸時代とかわることなく歌壇を形成していたのである。

以上のような各流派は、次第に一つの集団傾向をもつようになってゆくが、その背景に宮中における和歌を尊重する空気が大きな働きかけをもった。それは、御歌所派、もしくは宮内省派と呼ばれたもので、最初のころは、明治二年に侍従候所が歌道御用をつとめることとなり、その役に三条西季知が任命される。そして、同四年には歌道御用係がおかれて、八田知紀・福羽美静がその係となる。さらに七年以後は御歌会始に国民一般からの和歌詠進が許され、

十二年からは、その詠進歌の中から選ばれた作品が御前で披講されることになる。その後、二十一年には御用係は発展的な解消を見て、宮内省に御歌所が設けられ、そこに、長・参候・寄人・勤務という職制が置かれ、初代所長には高崎正風が任じられたほか、参候以下の役にも当時の有力な歌人たちが選ばれた。このようなことなどからして、次第に一つの流派の形をもつようになるのである。

このような旧派和歌時代に、八田知紀の門下で、宮内省に仕えて歌壇で活動を示した岐阜県出身の女流歌人に下田歌子がある。

歌子は恵那郡岩村藩の藩士平尾録蔵しゅうぞうの長女で、安政三年（一八五六）七月八日に岩村で生まれている。本名は平尾銘せきという。明治三年に上京した父の録蔵は新政府により宣教使史生に任じられている。神祇省の下級官吏である。翌年、父を追って上京した銘は、そのあくる年の明治五年、宮内省に女官見習として出仕することとなった。六年には権命婦に任じられている。

地方の一小藩士の娘が、それまで公家や大名の息女に限られていた女官に任じられたのは、女官を民間からも起用しようとする明治新政府の方針に沿ったものと考えられる。上京した銘は歌道御用係の八田知紀に歌を学んでいたから、この知紀などに人柄や歌才を認められて宮中出仕の推薦を受けたものと推察される。宮家武士の娘である税所敦子も、

歌を学んでいた八田知紀の推挽で、銘の二年あとに宮中に
出仕している。

宮中に奉仕するようになった銘が、その感激を歌に詠んで皇后（照憲皇太后）に奉ったところ、皇后はそれを誉めて銘に歌子の名を賜わり、以後、銘は歌子と称することになったと伝えられている。

その後、歌子は明治十一年に宮内省を辞して下田猛雄と結婚した。しかし、同十四年には桃夭女塾の塾頭となって華族の息女の教育にあたり、十七年に夫が没したあとは再び宮内省に出仕した。十八年には創設された華族女子学校の教授、さらには学監となった。一方、歌子は一般女子教育のために実践女学校と実践女子工芸学校を創設、晩年まで校長をつとめた。昭和十一年（一九三六）八十一歳で死去。従二位勲二等に叙せられた。

以上が下田歌子の経歴であるが、次に彼女の作品について見てみたい。

歌子の著作は、喜寿の記念に実践女学校から刊行された『香雪叢書』全六巻によって見ることができ、その第二巻『雪の下草』（昭7・12）が歌集になっているので、その中から、まず上京して間もないころの作として、「梅遠薫」と題した

春もまだあさかせ寒き手枕にゆめかあらぬか梅の香ぞ
する

という歌について見ると、早春の朝、手枕をする作者のと

ころへ梅がかなたから薫ってくるという風雅な世界が詠まれているが、それはたとえば新古今和歌集に収められた藤原俊成の女の作「風かよふ寝ぎめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢」の歌などに歌われ、その後くり返し詠まれてきた、従来の和歌の類型を一步も出ない観念的な作品である。

その点は、歌集『雪の下草』の「明治時代後期」の章に収められた「おほる川にて落花を」と題した

大井川いは間をぬひて行く舟のさをのしづくに散る桜かな

の歌でも同様である。この歌は、前の歌とちがって実際にその地に行つて詠まれたものらしいのであるが、それにもかかわらず観念的な趣向によって詠まれているのである。

歌子の短歌で岐阜とかかわるものとしては

綾錦着で帰らずば三国山また再びは越えじとぞ思ふの歌が知られている。彼女が明治四年に上京するに際して詠んだ歌という。この歌は、昭和十年、彼女の八十歳の長寿を祝つて、三国山の霧ヶ城址に実践女学校出身者たちによって顕彰歌碑に刻まれた。この歌に詠まれた三国山は、岐阜県土岐市、愛知県瀬戸市および西加茂郡藤岡村の三つが接する所にそびえる標高七百一メートルの山。歌子が上京のため美濃を離れるとき、最後に眺めた故郷の山だったのである。

この作者の場合は、その多くの作品は、岐阜に在住して

歌壇の動向を身につけて詠んだものではなく、東京に在住し、宮内省派の歌人たちと直接に交わるることによって明治初年代の歌風を身につけていったわけで、岐阜の歌人とはいっても極めて特異である。

ここで再び全体的な歌壇の動きを明治十年から二十年ごろについて見てみると、いわゆる旧派の歌人たちは、流派によって多少のちがいはあっても、そのほとんどが前代の遺風を墨守して、実感を離れて花鳥風月に遊ぶたぐいの歌を作っていた。

そうしたところへ、明治十五年八月に外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三名によって『新体詩抄』が刊行され、和歌・川柳・漢詩といった旧来の短詩型は複雑な思想や感情が表現できないから近代の文学とはなりえないと主張する。すると、その主張に共鳴する者が現れ、和歌についてもこれを否定する者が出てくるが、その一方では明治二十年ごろになると、和歌を時代に適應するように改めようとする論議が生まれる。

こうした明治二十年代前半の和歌改良論議は、明治二十六年になって、落合直文があさ香社を結成するに及んで具体的な実践段階に移る。そして、そのあさ香社の一員であった与謝野鉄幹は、翌二十七年五月に評論「亡国の音」を「二六新報」に発表して短歌革新の主張を鮮明にうち出し、「丈夫まじらふぶり」の、旧習にとらわれぬ新しい歌風を見せる。

一方、すでに俳句革新に立ち向かっていた正岡子規も、明治二十七年ごろから短歌の革新にも関心を寄せるようになり、明治三十一年になると、二月から三月にかけて、新聞「日本」に「歌よみに与ふる書」を発表して旧派和歌を批判攻撃し、和歌革新の立場を明確にし、また同紙に「百中十首」を掲載してその実践を示す。

このような人々によって詠まれた歌は、当時、旧来の和歌に対するものとして、新派和歌と呼ばれたのである。いまここで、明治三十年代半ばの主だった新派和歌の結社を挙げてみると

あさ香社 新詩社 竹柏会 根岸短歌会 いかづち会 などということになる。

これは大まかな分類であるが、この稿では紙面の都合もあって、そのうちで岐阜県と特に深いかかわりがあった根岸短歌会との関係を述べることにして、ほかの結社については、次の機会に譲ることにしたい。

そこで、根岸短歌会と岐阜とのつながりであるが、まず、主宰者の正岡子規について見てみると、彼は東京を発って郷里の松山へ向かう途中、岐阜の地に足をとどめている。明治二十二年七月一日に東海道線の新橋―神戸間が全線開通したが、子規はこの東海道線を利用して西下、七月五日に岐阜で下車して一泊している。のちになって彼はその印象を「旅」（「ホトトギス」明32・7）という文章に書き

とどめた。

彼はまた翌二十三年の七月二日にも学年末の試験をすませて帰省する途中に大垣で下車し、玉屋旅館で一泊する。この時の印象は前掲の「旅」の中に「大垣の旅屋、家は小さけれど、間は奇麗なり。女の色白き事この名物なるべし。」と回想している。

さらに翌二十四年の六月、学年試験を途中で放棄した子規は、こんどは松本・善光寺・塩尻を経て木曾路をたどっている。馬籠を通って美濃に入った子規は、余戸村（現、瑞浪市大湫町）、伏見村（可児郡御嵩町）にそれぞれ一泊したあと、次の日は舟で、今日「日本ライン」と呼ばれている木曾川の急流を下り、犬山城の下を過ぎて木曾川停車場の鉄橋下で舟を上がり、そこから汽車で西下している。

「かけはしの記」（新聞「日本」明25・5・27、明25・6・4）は、このときのことを記した紀行文で、木曾川下りを終えて茶店に小憩ののち汽車に乗るところで筆を置いている。

このように、子規が岐阜県を訪れたのは第一高等中学校および文科大学国文科に籍を置いていた学生時代のことであるが、「まだ根岸短歌会の発足を見ない時期のことであるが、「かけはしの記」の旅の道程は、あとで述べるように、門下の長塚節が子規の没後に師を偲ぶ心から同じ道筋をたどっているので特に記しておく。

さて、生前の子規に直接に会うということもあり、作品の上にその影響を受けることの多かつた岐阜県人は、俳人の五十川茶村と、最初俳句に手を染め、のち短歌に移った柘植潮音、それに俳人の塩谷鶯平の三名であろうと考えられる。

五十川茶村は本名を行蔵といい、揖斐郡池田村（現、池田町）六ノ井の人、俳句に親しみ、明治三十年二月、はじめて子規に面会している。子規は「明治三十年の俳句界」（新聞「日本」明31・1・4）の中で、この年に地方にあつて「歩を進めたる者」として、この茶村を筆頭に推している。この点、茶村は地方在住のまま子規の新しい俳句傾向を受け継いだものであり、先の下田歌子の場合とは異なっている。

茶村の影響で、その兄の五十川鴨脚子（準一）や甥の松原蓼圃も俳句を作り、西濃地方に日本派の俳句が拡がることとなった。このうちの松原蓼圃はやがて短歌に移って「馬酔木」に熱心に作品を見せるようになる。

次に柘植潮音であるが、本名を惟一といい、元大垣藩士であつた父四郎、母ふじの長男として明治十年七月三日に生まれた。父が明治維新のあと、旧藩主の戸田氏共家に、家務や会計をつかさどる家扶として勤めていた関係で、潮音は東京神田駿河台の戸田邸内で生まれている。東京高等師範学校付属小学校および中学校を卒業したのち、明治二十九年に第一高等学校に進んだ。中学時代から俳句に親し

むようになっていた潮音は、翌三十年に山田三子、松根東洋城らと語らつて一高翠風会を結成し俳句を作つた。同三十二年七月、前月から出席するようになった三子とともに、子規庵の句会にはじめて出席し、以後、句作に努める。子規は「明治三十二年の俳句界」（「ホトトギス」明33・1）において、「新に廿二年中に頭角を露はしたる者は東京に於いて潮音、格堂、三子……」と述べて、潮音をその筆頭に掲げ、しかも「比較的佳句多き」者としており、囑望すること大であつた。しかし、彼の俳句は明治三十五年五月号を最後に「ホトトギス」から姿を消す。潮音の関心が歌の方に移つたからである。

ここで、その当時の子規庵歌会について見ると、子規は明治三十一年三月、自宅においてはじめて歌会を開いた。このときの歌会には、まだ歌人の参加を見ず、このあと中絶していたが、三十二年三月十四日、こんどは香取秀真、岡麓ら歌人が参加して開かれる。これが根岸短歌会の起りで、このあと四月十八日、七月二日、八月六日というように開かれてゆくが、潮音は八月六日の例会から出席するようになり、そこで、先に加わつていた香取秀真、岡麓、そして翌三十三年になって参加した伊藤左千夫、長塚節らを識る。潮音はこれらの歌人たちとともに子規庵における万葉集輪講会にも参加している。

明治三十四年に潮音は両親といっしょに郷里の大垣に帰つたが、明治三十六年に左千夫らの手によって根岸短歌会

の機関誌として「馬酔木」が刊行されると、潮音は、これに短歌や詩、また「大垣だより」と題する随想などを投稿している。この「馬酔木」誌上には「鶉籥会詠草」として、潮音のほかに塩谷華園（鶉平）、松原蓼圃、日比歸麓園などの短歌がたびたび掲載されている。この鶉籥会という会は塩谷鶉平の主宰する「鶉川」の句会の名であったが、歌会を兼ね、歌の方の中心は潮音であった。

潮音の短歌は

夏の夜の港に物の音絶えて東の岬月出でんとす

雨まじり風吹くなべに狭庭への芒の穂浪かたなびく見

ゆ

などのように、子規の教えを忠実に守って、情景をていねいにとらえる写生の手法をとっており、そこに詩情が感じられるような作品が多い。

このように「馬酔木」に投稿を続けた潮音も、この雑誌が明治四十一年に終刊すると、同年、新たに「アララギ」が刊行されてもこれには加わらなかつた。左千夫との間に感情の齟齬があつたことによるものである。しかし、創作を止めることはなく、晩年に至るまで短歌・俳句等を「美濃文学」「日本及日本人」等に発表しており、その中には、不破の野の並松長路旅行けば松の木の間伊吹山見ゆなど郷里の風土と深くかかわつた叙景的な作品が多く見える。

潮音は、昭和十年十一月十二日、五十九歳で没したが、

その後、十二年十二月、鶉籥会の仲間であつた加藤木樫の編集で、『潮音遺稿』が岐阜市鶯谷町一番地の戸部文昌堂から刊行された。これには、短歌四百十三首のほか、俳句、俚謡、漢詩、随想、書簡（加藤木樫宛）を収め、それに遺影、略年譜を附している。

多くの人のいうところから考えるに、潮音は温好な性格の人だつたらしい。そのようなこともあつて、岐阜歌壇を強く牽引してゆくというには欠けるところがあつたようである。しかし、とにかく、在京中は子規生前の根岸短歌会の興隆期に子規やその門の歌人たちと親しく交わり、岐阜に帰つてのちも、鶉籥会を中心に、ゆるやかではあるが根岸系短歌を普及させ、一般に浸透させるのに力があつたのである。

もう一人、子規に面会したことがあり、根岸派の短歌を岐阜の地に広めるのに力があつた人物は塩谷鶉平である。鶉平は明治十年五月三十日、岐阜県稲葉郡鏡島村（現、岐阜市）江崎百九十二番地に生まれた。岐阜の中心部から西へ約三キロメートルほど行つた所、長良川の左岸にあたる。本名を熊蔵といい、のち宇平を襲名した。別号は華園、のち鶉平を称した。塩谷といふ姓は、正しくはシオノヤといつたようであるが、今日、岐阜の地では一般にエンヤと呼びならわしているので、文学辞典などでもエンヤとして収めることが多い。塩谷家は田地五十四町歩、ほかに広大な

竹林を所有する大地主の資産家であった。鵜平は岐阜中学を中退して東京専門学校（現、早稲田大学）に学び、明治三十一年に邦語政治科を卒業、翌三十二年の末に帰郷して、それからのち生涯、岐阜在の江崎の地に住んだ。

鵜平は中学生時代から俳句を作っていたが、明治三十二年から「日本」に投句を始め、三十三年四月十六日の新聞「日本」に子規選で一句、「ホトトギス」四月号にも鳴雪選で一句が入選、句作に熱意を示す。三十五年六月末に上京した彼は、七月一日に佐藤紅緑庵の句会、十三日には碧梧桐庵の句会に出席、その間に病床の子規を見舞っている。そして明治三十六年二月には雑誌「鵜川」を創刊した。根岸短歌会の機関誌「馬酔木」の創刊より四ヶ月前のことである。この雑誌は俳句に限らず短歌にも紙面をさいており、伊藤左千夫、長塚節、蕨真ら、根岸派の錚々たる歌人が毎号作品を寄せ、選歌にあたり、随時、歌論歌話を載せている。子規生存中に成立した根岸派としての最初の地方歌会である名古屋短歌会の詠草も収めている。こうした点での鵜平の短歌関係の功績は見落とすことができない。

この「鵜川」は、明治三十六年に十冊、翌三十七年に七冊と、計十七冊を刊行して、三十七年十月二十日発行の二巻五号をもって終刊し、埼玉県北足立郡安行村のあられ社から発行の「叢」と合併した。

その後、鵜平は大正二年十月から月刊の俳句雑誌「土」を創刊、没するまで二十八年間にわたって三百十五号まで

刊行をつづけ、全国の同好者に寄贈して新傾向俳句のために尽力した。新傾向俳句の指導者であった河東碧梧桐に対して傾倒した鵜平は、計り知れない多大の経済的援助を行ない、碧梧桐はたびたび鵜平宅に滞在している。

また、昭和二年には新傾向の俳句雑誌「俳藪」を創刊、門下の指導に力を注いだ。鵜平は昭和十五年十二月八日に六十四歳で死去したが、その後、「俳藪」は弟子に受け継がれ、現在は高島寂三が主宰、今日も地元の岐阜地方を中心に深く根をおろしている。

鵜平の短歌作品は

多度が嶺の檜なちの冬木をたくぐり流るゝ滝の水はか涸れずも

浮寝鳥うね浮べるなべに冬川のなべに小紅の渡見れどあかなく
といったもので、前者は養老での作、後者は鵜平宅に近い長良川のなべに小紅の渡しでの詠であるが、その生涯のほとんどを岐阜の地に送り、俳誌の「土」という標題の示すように俳句を通して周辺の農村風景を見つづけていっただけに、歌の方も風土的な特色をもつ作品となっている。

これまで、子規門の岐阜県人の五十川茶村、柘植潮音、塩谷鵜平の活動について見てきたが、最後に、これらの人々とのかわりや岐阜を訪れた、伊藤左千夫と長塚節について触れておくことにしたい。

まず、伊藤左千夫について見ると、彼は三度、岐阜を訪

れている。

その最初は明治三十六年十一月のこと、同年九月十五日付の塩谷鶴平宛の書簡などから判断して、このときの来遊は、鶴平をはじめ、岐阜や名古屋の、子規門の歌人や俳人たちの招待に応じたものらしい。このときには蕨真もいっしょに来た。左千夫と蕨真の二人は、十一月十四日に東京を出発し、浜松に一泊ののち、十五日には名古屋に来て、名古屋短歌会の奥島欣人を訪れ、同地の俳人の伊藤観魚(直郎)と四人で市内を散策ののち、岐阜から来た鶴平やその他の俳人や歌人たちの催す歓迎の歌俳会に出席している。そのとき左千夫が「蔓引きてかつ甘藷掘るよ礪畠」の句を詠んで好評だったことが「鶴川」十二月号の「余白録」に記されている。十六日、左千夫と蕨真は、鶴平・観魚・欣人と共に大垣に潮音を訪ね、そこから養老に足を伸ばして見物ののちそこに一泊、翌日の昼過ぎに潮音宅にもどった。左千夫と蕨真は、ここで岐阜や名古屋の人々と別れて西下、石山寺、奈良、京都をめぐって、同月二十四日に帰京している。

このときの左千夫の歌を交じえた紀行文が「馬酔木」の明治三十七年二月号と四月号とに連載された「西遊日抄」で、その中の養老の歌には

いにしへの御代の御年の名に負へるめづらみ滝をけふ
見つるかも

うつそみの背くすべなみ山くだる吾を呼ばぬか多度の

山祇やまづみ

といったものがある。紀行文の方を見ると、「遠く人界を離れしさま総て是太古の情」といったことばが見え、この滝の、山深い、蒼古な姿に感じ入ったことをうかがわせるが、右に挙げた歌なども、それに応じて調べがひどく古樸である。そして、この滝は左千夫の気に入っただのであろうか、「養老滝」長歌三首、反歌七首。「養老の朝」長歌一首、反歌一首と、数多くの歌を作っている。

次に左千夫が岐阜へ来たのは、四年たった明治四十一年のことで、六月十三日に東京を発った彼は、愛知県の岡崎、名古屋、京都などを回って、その帰途、大垣の潮音を訪ねている。その日、二人は岐阜に出て長良川の鶴飼を見物している。その折の左千夫の歌が「青葉の旅」の題で、明治四十年七月の「趣味」に発表された。これには「六月十七日大垣に潮音を訪れて共に長良川の鶴飼を見る」の詞書につづいて、

月よみのいまだ入らねば鶴飼らも舟出さぬらしさ夜ふ
けぬれど

河鹿鳴く夜川の風の寒けきに鶴飼待ちつつさ夜ふけに
けり

といった歌がある。まだ見たことのない鶴飼の始まるのを待ちこがれる気持のにじみ出た歌になっている。この旅では、左千夫は岐阜を発って木曾を経て信州に入り、下諏訪に島木赤彦を訪問、六月二十六日に帰宅している。

最後に左千夫が岐阜を訪れたのは、翌四十一年のことであつた。五月八日に東京を発ち、十二日まで信州に滞在して同地の歌人たちと歓を尽くした左千夫は、そのあと一人で越後に向かい、新潟県刈羽郡南鯖石村に三泊した。この土地の出身で、左千夫の愛人だつた岡村チカが事情あつて南鯖石村に帰っていたのに逢おうとしたのである。しかし、その希望も達せられぬまま、十五日にそこを発つて敦賀を経て京都に遊んだあと、二十一日に大垣の潮音を訪れている。

このときの印象をもとにして書いた左千夫の小説が「浜菊」で、これは明治四十一年九月の「ホトトギス」に発表された。この小説の冒頭に「汽車がとまる。瓦斯灯に『かしはざき』と書いた仮名文字が見える」とあつて、作品の舞台は新潟県の柏崎ということになっているが、実際は大垣が舞台で、潮音を訪れたときの不快な印象を描いたもの。以前、東京の歌会の同人であつた旧友を訪問して冷遇されたわびしさを主題にして私小説風に書いており、大垣の潮音をモデルにしたことは、少し事情を知る者にはすぐわかる書き方であつた。

あとになって、このように左千夫に書かれたことを知つた潮音は、同年十二月八日付の長塚節に宛てた手紙の中で、小生よりは今後氏に対してそれとなく一切の交際音信を絶つべく決心致候。

と左千夫と絶交する決意を伝えている。こうして潮音と左

千夫の交わりは永久に絶たれたのであつた。左千夫は岡村チカに逢えなかつたことなどから、そのころ精神が平静を欠いていたものと考えられる。また、逢えなかつたことを打ち明けて慰めてもらひたかつたということもあつただろう。左千夫は初対面の学生に対しても愛人ののろけ話をするといったざつぱらんなところがあつたが、一方の潮音は、生まれが旧大垣藩主戸田家の差配をまかされていた旧家でそんな性格ではなかつた。そのところに不幸な出来事の原因があつたと思われるが、この事件が以後の本県の根岸系短歌の勢力を弱める結果になつたことは事実である。

次に、左千夫と鶴平との交渉について述べてみよう。まず、二人の交際の始まりはというと、鶴平が明治三十五年七月ごろ、上京して子規や碧梧桐のところを訪れたとき、左千夫宅も訪れているらしく、これが始まりである。そのことは奥島欣人の「名古屋短歌会のおこり」（「鶴川」明36・5）という文章から判断される。

その翌年の明治三十六年二月に、鶴平は根岸派の文学雑誌として「鶴川」を独力で創刊する。その直前の、明治三十六年一月三十日付の鶴平に宛てた左千夫の手紙を見ると、玉翰拜誦仕候。其後御無沙汰いたし候処、ますます御健勝之段奉賀候。さて此度雑誌御発行之由、折角御憤勵之趣、よそ事とは存じ不申候。

とあつて、左千夫がこの雑誌に期待していることがわかる。

また、これより前、一月十四日付の奥島欣人に宛てた書簡でも、左千夫はこの雑誌への協力を約束している。同じ子規門でも俳句の方では、すでに「ホトトギス」が機関誌として出ていたのに、短歌の方ではまだ何も出ていない時期のことなので、短歌にも紙面をさくという雑誌「鶉川」の創刊に左千夫が期待するところは大きかったのである。

そんなこともあって、左千夫は「鶉川」の創刊号（明36・2・25）には、発刊を祝った「言霊之真名兒鶉川兒が美濃の国に生れ出たるをことほぎて天の彩の瑞筆を塩谷華園ぬしに贈る歌並に序」を寄せている。この歌の序は六百六十七字からなる長いものであるからそのあらすじだけを紹介するが、卯の歳（明治三十六年）一月十五日の夜、作者は天界に舞い上って正岡子規と逢い、子規の遺族や門下の人々が無事であることを報告した。しばらく語り合ったち辞そうとすると、天界の子規は別れに臨んで綾織のふくさに包んだものを与えたが、暁方に家に下り着いた作者が開けてみると、目もあやな色どりのある筆であった。そこで今、「鶉川」の創刊を祝って、その一管を贈る、というもので、そのあとに

みづみづし美濃の鶉川兒稚兒ながら世を驚かせ瑞み筆
もち

鶉川兒が手振り振ふ玉筆の穂先ゆ立たむ虹をはや見む
という二首がつづいている。新しく誕生しようとする「鶉川」に子規派の文学を推し進める力になってもらいたいと

いう左千夫の願いが濃く出た作品と言える。

こうして出発した「鶉川」は十七号まで刊行されて、翌三十七年十一月に「霰あられ」と合併のため終刊号を迎えるが、左千夫は、終刊までに、長歌二首、短歌六十七首、俳句一句、歌論「根本的相違」「連作乃歌」「歌話漫草」、写生文「灌仏会」「小港誕生寺」を寄せるとともに、六回にわたって選歌を行なっている。彼のこの雑誌へのかかわりの深さを知ることができる。

左千夫のほかにも、地元の柘植潮音は言うまでもなく、長塚節、蕨真、蕨樞堂、赤木格堂、香取秀真、古泉幾太郎（千樫）、石原阿都志（純）、篠原千洲（志都兒）、柳本城西など、「馬酔木」の中心的な歌人たちが、この雑誌に作品を寄せている。

左千夫と岐阜とのつながりに続いて、次に長塚節の場合について見てみよう。

節の岐阜来訪の第一回は明治三十八年の九月のことである。八月十八日に茨城県茨城の自宅を発って、安房・甲斐・信濃を経て木曾から美濃に入り、さらに近江・京都・丹後・摂津・伊勢を回って、十月十三日に帰宅している。翌月の「馬酔木」に節は、その旅での作、百三十六首を「羈旅雜詠」と題して発表した。その旅の岐阜での行程をたどってみると、九月十日に妻籠・馬籠を経て岐阜県に入った節は中津川に一泊、翌日そこを発って、大井・釜戸・御嵩を通

り伏見に泊まった。ここらあたりの行程は、先に触れた、子規が明治二十四年に行なった「かけはしの記」のコースと同じで、子規への傾倒追慕の気持から、身をもってその道筋をたどったのである。節は翌十二日に伏見を発ち、子規にならって木曾川を舟で下ろうとしたが、その日は舟が早く出たため果たさず、木曾川沿いに徒歩で行き、各務野を過ぎて、夕方、岐阜に入り、江崎の鶴平宅に入っている。

到着した彼は月樵の二重折の屏風など塩谷家収蔵の書画を鑑賞したりなどして三泊し、十五日の昼過ぎに大垣へと向かった。その日、節は潮音を訪ねた。十六日、節は潮音に導かれて養老の滝に遊び、翌日は潮音ならびに松原蓼圃と揖斐川上流の房島ぼうじまやなに赴いて鮎あなの落ちるのを見た。蓼圃は本名を松原祐馬といい、揖斐郡本郷村（現、池田町萩原の人。親戚筋の五十川茶村・鴨脚子きょうだいと共に「ホトトギス」に投句していたことは先に触れたところであるが、やがて短歌も作るようになり、このころ「馬酔木」によく歌を寄せていたのである。節は十七日は蓼圃の家に泊まり、翌日は彼の案内で坪井伊助を訪ねている。伊助は本郷村深草の人で、竹の研究改良、栽培につとめ、竹林翁と呼ばれてよく知られていた。この日、節は近江をさして大垣を発つ。

ここで、節のこの旅での作「羈旅雜詠」中の、九月十二日の作である

木曾川の沿岸をゆく

鱗なす秋の白雲棚引きて犬山の城松の上に見ゆ

の歌を見てみよう。木曾川沿いに西へと進む折、志賀重昂が「日本ライン」と名付けた清流の向こうに犬山城を眺めて詠じたもの。「かけはしの記」で師の子規がたどった道歩みつ、師から伝えられた写生の手法を忠実に実行して詠んでいる。秋天を感じさせるすがすがしいこの歌は、一步一步、中仙道筋をたどったことによって生まれた一首である。

次に、

十七日、潮音、蓼圃の両氏と揖斐川の上流に鮎あな築あなを見る

揖斐川の築落つる水はたぎつ瀬ととろに砕け川の瀬に落つ

という作について見ることにする。「やな」というのは、川瀬で鮎などの魚を捕えるためのしかけで、水流をせき止めて一ヶ所だけから流すようにし、そこに来る魚を竹を編んだ簀すいに落として取るものである。節らの赴いたのは、大垣市から十五キロメートルほど北に行ったところに揖斐川町があるが、その中心部からさらに二キロほど西に行った房島ぼうじまに設けられたやなであった。

このやな場は江戸時代からあって、藩に運上金（税）を納めるかわり、特別の保護を受けていたといういわれのあつたものであつた。今日でも、このやなには夏から秋にかけて、訪れる客が多い、その方面ではよく知られた所であ

るが、右の一首は、水量も豊かな房島やなの力動感をとらえて、節の歌には珍しい調子の張ったものになっている。

明治四十一年の四月、節は三年前に潮音を養老の滝を訪れたときのことを綴った写生文の「松虫草」を「アカネ」に発表した。それは、大垣や養老の風景を生き生きと描いており、その眼前の自然や人事に中心をおいた写生作品の世界は、節の来訪より二年前に、同じように潮音に伴なわれて訪れた左千夫の、「蒼古の感」に中心をおいた紀行文「西遊日抄」のそれと大きな対照を見せている。

明治三十八年について節が岐阜を訪れるのは四十三年の十二月で、前回訪れた揖斐郡池田町深草の坪井伊助を訪れ、竹の栽培について教えを受けている。今回の旅は単なる歌を詠むための遊覧ではなく、伊助に会うのが大きな目的であった。十二月十五日の日付で自宅から岡麓に宛てた手紙には、

今日兼ねての志望を達して、竹林の智識を得べく、美濃の大垣を差して参り可申候。

とある。そして、同月二十日付の京都発信の左千夫宛書簡では、

午後に来て今夜ぶらぶらと京極から暇手まで歩いて見申候。一寸宇治と奈良を見て帰らうかと存候。今度の旅行は竹の研究の為に、潮音、蓼圃の家に泊る。

とある。潮音、蓼圃の家に宿って、坪井伊助を訪うのである。

竹林翁と称されて世に知られていた伊助は、当時、研究と指導のため全国各地を奔走し、彼が村内に設けた模範林にはあちこちから見学者が来ていたという。伊助は、これよりのちではあるが、大正三年には『竹林造成法』、翌年には『竹類図譜』を著わした篤学の人で、後に藍綬褒章を受けている。

この、伊助訪問の旅から帰って間もない明治四十三年の春、節は竹の栽培につき指導を受けるために、伊助を結城郡石下町国生の自宅に招いている。この年六月九日付の、弟の小布施順次郎宛書簡によれば、当時、長塚家には、岩井銀行からの四千元をはじめ、合計六千八百円の負債があったらしい。竹はその当時、建築・土木・器具製作・農業等の資材、また食用などと用途が広がった。竹を栽培し、それを売って借金を返済しようとしたのである。後のことではあるが、彼の「耕作手帖」を見ると、大正三年に九段歩、四年には一町歩、五年には三段歩というように竹の植え付けを行っており、竹林は合計して六町二段歩（六・一四ヘクター）に達している。竹によって借入金返そうという望みは、間もなく彼のどの病いが悪化したため、じゅうぶん実現を見るまでには至らなかつたようであるが、そのころの彼の手紙には、梅雨のころ竹藪に筍が次々生えてくるのを見る喜びが報じられており、病魔にとり付かれていた彼の晩年の慰みになっていたふしがある。

咽喉結核にかかった節は、明治四十五年、九州大学付属

病院で久保猪之吉博士の診断と治療を受けるため九州へ行くが、その前後、節は近畿・中国・九州の各地を何かに憑かれたように旅して回り、古美術を鑑賞する。いわゆる「牙え」の節歌風の形成に深くかわる旅である。このときの旅は、三月中旬に東京を発って、九月下旬に家に帰るといふ、半年の長きにわたるものであった。

この旅の途中で、節は九州の旅先から旅費の融通を依頼して、百円を鶴平から借りている。その事情については、福岡市外東公園裁縫女学校前 武井方から鶴平に宛てて出された三通の節の手紙の次のような文面によって明らかである。

○旅中少し望みを起し候こと有之、それには少々費用を要し候。俄には候へども今日思ひきつて斯く御願ひ仕り候。(五月十六日付)

○小生の希望する処は百円といふ多額であります。それでもどうか出来ませうか。成ることなら何とか御骨折を願ひたいのであります。(五月二十一日付)

○御厚志昨夜拝受しました。小生の希望通で恭く存じます。此で大に翼が延びる次第であります。病人としては国許へは一寸相談出来ぬ計画が成就されること、思ひます。(五月二十五日付)

このように、節の生涯のうちでも大切な意味をもつことになる旅は、鶴平の助力に負うところが大きかったのである。なお、この旅が終わり帰東の途中に、節は九月四日に

は潮音を大垣に訪ね、五、六、七、八、九の五日間は鶴平宅に泊まって、十日に岐阜を発っている。

翌大正二年にも、九州からの帰途、穂積駅で汽車を降りた節は、長良川を越えて江崎の鶴平を訪ねたらしい。節の潮音に宛てた四月十七日付の書簡に、国許からの急な知らせで貴宅に寄れなくなったが、鶴平宅には用事があって立ち寄る旨を報じ、節の日記の同月二十二日の条に「長良川渡船」のことを記している。穂積から鶴平宅に赴いたのであろう。

以上が、節の岐阜来遊のすべてである。節は久保博士らの治療の甲斐もなく、大正四年二月八日に九州大学付属病院で世を去った。

ここで再び潮音のことにもどりたい。

昭和七年の十二月、京都の岡崎で彼は帝展を観た。そして、そこに出品されていた「歌旅の長塚節」と題する画の前に立った彼は、のちにその感慨を

行く先の五百重の山を前にして地図に見入る節悲し
も

と詠じている。帝展に出品されたこの絵のことを知った潮音は岐阜から駆けつけたものであろう。二人は互いに旧家の息子同志で気心が通じ合ったのであろうか。同門の人々の中でも最も親密な交渉が晩年まであった。右の潮音の歌には、今は亡き友に寄せる熱い思いが溢れている。

今回は「明治歌壇と岐阜」の第一回ということで、宮内省派の下田歌子、それに根岸派の柘植潮音、またそれと深いかかわりをもった塩谷鶴平を取り上げ、鶴平や潮音を訪ねることの多かった伊藤左千夫、長塚節についても眺めた。これらの人々は

歌子||青年期に岐阜を離れて中央から岐阜を眺めた歌人

潮音・鶴平||岐阜の地に住んで岐阜の風土の中で歌壇の動きに触れた歌人

左千夫・節||歌壇の中心歌風と直結しつつ岐阜の風物に触れた歌人

というように分れるけれども、いずれも岐阜の風土とのかかわりの中で文学形成を行なっているところがある点で共通

しており、そこに岐阜との接点をもつ歌人たちである。

付記

この稿を成すにあたっては山口誓子氏『子規諸文』（養徳社 昭21・3）、高井秀樹氏「塩谷鶴平年譜稿」（「俳藪」昭48・9）、『長塚節四十年祭岐阜記念集』（同実行委員会 昭31・3）を参照させていただいた。また塩谷宇平氏・岐阜県立図書館・大垣市立図書館のほかの方々のご厚意にあずかった。記して謝意を表する次第である。
なお、文中の敬称は略させていただいた。

〈本学助教授〉